

その鼓動の、衝動のままに走れ

ナメクジ次郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は選抜レースで誰にも選ばれず燻っていた一人のウマ娘「ハーツシユラク」が、一人の新人トレーナーと出会い実力、ライバル、そして最も求めていたモノ――

「勝利」の二文字を手に入れる物語である。

目次

ハーツシユラク	1
トレーナー	5
必殺技	9
模擬レース	14

ハーツシユラーク

タツタツタ、と小気味好い音が夕日に照らされた神社の階段に響いている。

もう人もすっかり少なくなるこの時間に、一人きりで走るのが好きだった。同級生にスタミナを鍛えるように言われてから、ここでの階段ダツシユがすっかり私の日課になっている。

つまりもう慣れ切ったものであり、ここは勝手知つたる場所だ。

「さあ残り五百メートル！ ハーツシユラーク速い！ ハーツシユラーク速い！」

だからだろうか、いつもはしないような恥ずかしい、自分の走りに実況の真似事をしてしまったのだ。

「他のウマ娘を全く寄せ付けない！ 走る走る！」

イメージするのはダービーで勝つ自分の姿、その雄姿に心が躍る。

その証拠に私の心臓は、いつもの自主トレの時よりもずっと早く鳴っていた。

「ハーツシユラーク、今一着でゴォ——ール!!!」

階段を登り切り、勢いよく飛び上がってガッツポーズをする。

そんな事としては脚や膝にはあんまり良くないとわかっていても、アガってしまったものは仕方がないのだ。

誰も居ない私だけの時間、だから開放的になってもしょうがない。

恥ずかしくなんてないよ。

「お、おう……なんか思ってたより楽しそうな奴だなお前」

そう、それが私しか居ない空間であればの話。

階段を駆け上がった先の境内には、白衣を着た若い男の一人、つまり……。

(思いつきり見られた——めちやくちや恥ずかしいっす！)

恥ずかしさのあまり、ただでさえ運動で上がっていた全身の体温が急激に上がったのを感じた。

「落ち着いたか？」

「はい……見苦しいところ見せたっすね……」

ビックリしたやら恥ずかしいやらで悶える事十数分、上がった心拍数が落ち着いたところで、境内の中に設置されたベンチに案内された。

冷えたスポーツドリンクまで貰っちゃったけど、この人はなんなんだろうか。もしかして私のファン!?

なんて、デビューもまだなんだからそれはないよね。

「それで、あなたはなんなんすか？ 偶然ここに來たって感じじゃないっすよね、ファンっすか？」

「あー……なんというか、ここで自主練してるウマ娘が居るって聞いてな。実際に走りが見たくなっただからここに來た……新人トレーナー？」

「なんで自分の事なのに疑問形なんすか」

自分のことをトレーナーと言った彼に対する印象は、正直怪しい人だなというものだった。

神社に居るのに白衣だし、そのくせ履いてるのは量販店でよく売ってる合成樹脂のサンダルだし。おまけに疑問形だし。

それでも、もし本当ならこんなに嬉しいことはない、なんせ私は……。

「学園のトレーナーさんなら知ってるっすよね。今までの私の戦績、全部選抜レースっすけど」

「そうだな、詳細は映像残ってないから知らんが、二戦二敗でどっちも最下位。そして今までトレーナーが付いた経験は無し」

「それを知ってて、なんでわざわざ見に来るんすか、おかしいじゃないっすか。新人ならもつと強くて可能性のあるウマ娘に行くべきっすよ！ 同級生なら、委員長とかタキオンさんとか、強い子だっていっぱい居るっすよ！」

「サクラバクシンオーにアグネスタキオンか、確かにあいつらすげえよな。まだデビューしてないのが意外だわ」

「そうっすよ！ 他のトレーナーに取られるまえにそっちに唾つけといた方がいいっすよ！」

「唾つけるってお前言い方があるだろもつと……いやその話はいい、こっちにもまあ事情があるんだよ。それにな」

「それに？ 何っすか？」

「負けが続いても、トレーナーに見向きもされなくても、それでもこっちは自主トレしてんだ。まだ諦めてないだろ？」

真剣な目でこちら見つめながらそういうトレーナーに、私は無言で頷いた。

「だからいいんだ、勝ちに飢えてるやつが一番いい」

ベンチから立ち上がったトレーナーはこちらへ向き直る、そしてまっすぐに私だけを見て、こう言った。

「ハーツシユラク、俺をお前の専属トレーナーにしてくれ。俺ならお前を勝てるウマ娘にしてやれる」

ターフに入ると、私の心臓はうるさいくらいに高鳴っていた。

ドクン、ドクンと周囲に聞こえてしまっているんじゃないかと思うほどの鼓動に少しだけ恥ずかしさを感じるけど、それも仕方ないよね。

今日は「選抜レース」の日、本格化を迎えて走力が開花したウマ娘がその実力をアピールする日。興奮しないはずがない。

結局あの後、例の新人トレーナーの誘いに関しては保留ということになった。

私の戦績を知っているとは言っても、実際のレースを見たことがないトレーナーにすぐにはいよろしくお願ひします。なんてお互いに都合が良すぎる。

それに、今日は選抜レースの日。私がどういうウマ娘でどんな走りをするのか、見てもらった方が早いと判断してレースを見るまで話を置いておいてもらうことにした。

私だってあの人の事をよく知らないし、あの人だって昨日会ったばかりなんだから。四の五の言ってられる立場じゃないにしても人生がかかっているんだし慎重でいてほしいのだ。

だってあの人も、私のレースでのいつもの走りを見ればきつと……。

「すう〜……ふう……すう〜……」

頭に浮かんだ悪い予想を打ち消すように大きく息を吸い、吐く。

レースの直前だというのに余計な、しかもネガティブなことを考えってしまった。これじゃあいつもの走りもできやしない。

「すう……」

もう一度大きく息を吸い込み、吐き出す。

肺に新鮮な空気が入って、それが血液と一緒に体中に送り出される感覚に、少しだけ気持ちよさを感じる。

レース前のこの感覚は嫌いじゃない、だけど勝利すればもつと気持ちがいいはずだ。

「お前を勝てるウマ娘にしてやる」

ドクン——ドクン——

ドクン——ドッドドッド

トレーナーに昨日言われた言葉と、レースへの緊張と興奮でおかしくなってしまうんじゃないか、そう勘違いしてしまうほどに心臓が早鐘を打つ。

まだ走ってもいないのに、運動した後のように高まる鼓動。

ゲートに入ってもそれは変わらず、体が早くしてくれと、走らせろと訴えてくるようだ。

もはや前意外見えない、そんな状態のままゲートが開く。

その瞬間、私の体は何か弾かれたように足を踏み出し、そして。

私は、また選抜レースに勝つことができなかった。

トレーナー

選抜レースの後、新人やベテラン問わずに様々なトレーナーが可能性を見出したウマ娘へと勧誘を行う、風物詩と化した光景。

その中で私はいつも通り、一人だった。

「一位のマンハッタンカフェの走りは見事だった」

「出走予定だったアグネススタキオンのドタキャンが残念でならない」

「レース序盤のあのエンジン音なんだったの？」

などと耳をすませば聞こえてくるが、やはり私は誰からも注目されていけないようだ。

最下位だったのだから当たり前だ、そのうえ私はいつもの走りをしてしまった。

スタート直後からの大暴走、ペース配分なんてない走り、そしてスタミナ切れによる失速。

緊張のせいなのか、それとも別の何かがあるのか、走りはいつもそうだ。トレーニングの時はそんなことは起きないのに、レースの時だけそうになってしまう。

こんな走りじゃ、昨日声をかけてくれたあのトレーナーもきっと私の事を見捨てるはずだ。

私はバカだ、レースを見てから決めてくれなんて言わなければ昨日のまま専属トレーナーが見ついたのに自分が損するような事言って。

その証拠に今私のところには誰も――

「悪い、ちよつと遅くなつたな」

そう思った矢先、声をかけられた。

この声、喋り方、そちらに目を向ければ例のトレーナーが立っていた。

「なん、で……」

「なんでって、約束通り来たんじゃないかよ。お前のトレーナーになるために」

「でも、私、また最下位だったつすよ。見たつすよね、あんな走りしかできないんすよ私は……」

「レースの結果は前の選抜レースと一緒だろ、それに俺は今日の走りから昨日以上に感じたぞ？」 お前と、お前のその体にある可能性を。だから俺の価値基準を勝手にお前が決めないでくれ」

「可能性……？ 私につすか？」

「だからまあ、そんなに自分を卑下するな、俺が見る目の無い奴みたいになるだろ——それとも、昨日の今日で心がポツキリ行って諦めちまったか？ マジでそうなら仕方ないけどな、違うだろ？」

トレーナーは真剣にこちらを真つすぐ見つめている。

昨日と同じ、全く変わらないその目で私を見ているのだ。

私の事を、会ってまだ一日しか経っていない弱小ウマ娘の事を、心底信じている目だ。

「私は勝てるウマ娘になれる」と、彼はそう信じているのだ。

どうして私なんかにそんな期待をしているのか、そんなことはわからないし多分考えたって私にはわからない理由なんだろう。

それならば、答えは決まっている。

「もう諦めた。なんて……そんなこと言えるわけないじゃないっすか！ だから……だから。よろしくお願いするっす……私を、勝てるウマ娘にしてほしいっす」

「おう、だったら明日から特訓な。お前の為のメニューと勝利の為のひっさ……秘策は容易してあるからな」

私がそう答えたのが当然であるかのように、普通に話を進められてしまった。

すっごい覚悟を決めたはずなのに、肩透かしをくらったような、恥ずかしいような。

「あつ、そういうえば名前聞いてなかったっすね。私も名前聞かれてただけで、自分から言っていないし。自己紹介でもするっすか？」

「そーいやそーうだな……いやでも、今更やるか？」

「別にいいじゃないっすかー！ じゃあやるっすね、私はハーツシユラークっすー！」

「……神崎楓、できれば名前じゃなくて苗字の方で呼んで欲しい」

「てな具合で、ついに私にも専属のトレーナーができたんすよ！」

「ふうん。それはよかった、ついに君もトウウインクルシリーズにデビューというわけだね」

「そうなんすよー！ ついに、ついに！ レースに出れるんすよー！」

「おっと、あまり興奮して動くとき紅茶が零れてしまうよ」

数時間前の興奮を思い出すように語っているとついつい熱が入ってしまい、対面に座るアグネスタキオンさんに静止されてしまう。

ちよつと子供っぽく喜びすぎたな、と自分でも思うけど、どうしても抑えきれない。

そもそも、抑えが効かないからなぜか以前から私に目をかけてくれた彼女に報告に来たわけだし。

「それにしても、ふむ。このような言い方は失礼だが君の素質に気づくトレーナーは現状居ないと思っていたんだがね。今年の新人トレーナーは、桐生院家の者といいモルモットくんといい粒揃いらしい」

「モルモットくん……って誰っすか？」

「私の実験に付き合ってくれる予定の新人トレーナーの一人さ、もう一押しだと思っただけだね」

「へえ、じゃあタキオンさんはそのモルモットの人とデビューするんすか？」

「まさか！ 彼女は確かに優秀そうなモルモットだがデビューするかどうかは別だよ。私は自分の研究を優先したいからね」

「そうっすか……じゃあしようがないっすね」

今日の今日までトレーナーの付かない弱小ウマ娘だった身でこんな事を考えるのはおこがましいかもしれないけど、同じクラスで私を評価してくれていた彼女と一緒にトウウインクルシリーズを戦えないのは残念に思った。

でも本人にその気がないなら、私がどうこう言っても仕方のない事だ。

「そんなことより、担当がついたのなら明日からは専用トレーニングだろう？　今後あまり実験の時間が取れなくなってしまうたら困るからね。ここいらで一本薬を飲んでくれないかな？」

「え、嫌っすけど」

「ええー！　私のところに自分から来たんだからそういう事だと思っ
ていたんだが、違ったのかい？　それとも私を焦らしているのか？
だとすればそれは要らない気遣いだが」

「タキオンさんの薬苦いじゃないっすか！　味の方が改善させるまで
飲まないって私言っただっすよね？」

「そうだったかな？　それなら安心するといい、前回よりも飲みやす
さは改善していると言っついモノが出来上がっているとも」

「信じていいんすね？」

「勿論、研究に関しては嘘をつくことはないよ」

その答えを聞いて安心したので、タキオンさんから怪しい色をした
液体が入っている試験管を受け取る。

中身を飲もうとすると既に強い臭いが鼻をつく、けど信じていいと
言われたので素直に飲むことにした。

あまりのどごしのよくない液体を勢いよく流し込む、味は……

「確かに前よりマシだけど全然苦いじゃないっすかー！　タキオンさ
んの嘘つきー！」

「私は別に改善しているとは言ったが苦くないとは言っていないよ。
それじゃあ効果の方を観察させてもらおうか」

「だ、ダメっす！　水！　水じゃなくても何か飲まないと口の中苦く
て死ぬっす！　はちみー！」

「ああっ！　待たないかシユラーク君！」

口の中に残る苦味をどうにかしたくて私は教室を出て走りだした。
なんでもいい、廊下の蛇口でもいいから口をゆすがないとどうにか
なってしまう。その一心で走り続けた。

次の日以降、脚を光らせながら走る生徒の噂が学園中に広まってし
まい、しばらく外を歩くのが恥ずかしかったのは言うまでもない。

必殺技

「ハーツ、お前は自分の強みはなんだと思う」

選抜レースの次の日、授業が終わりついに専用トレーニングが始まると思いトレーナー室に行った私に対して、神崎トレーナーは開口一番そう告げた。

強み、今まで勝った事がないのに強みなんてあるのだろうか？もしあつたとしても、小さなものだと思えない。

「3、2、1、時間切れだな。正解は昨日のレースでも見せたあの大暴走だ」

「……あつ？」

あまりに予想外な言葉に、思わず変な声が出てしまった。

大暴走、あの大暴走と言ったのだろうかこのトレーナーは。

あれがあるから負けているのに、私の強み。

「昨日のレースの映像を何度も見返したが、お前が暴走してる時の速度は目を見張るものがある、なんならあの一瞬は好走をしたマンハッタンカフェのラストスパートと遜色ないレベルだったかもな。それに——」

「ちよ、ちよつと待ってください！ 速度って、そりやスタミナも考えずに全力で暴走してるんすから速いに決まってるじゃないっすか！」

流石に一着のマンハッタンカフェさんと遜色ない、とまで言われると否定したくなってしまふ。

最下位の私なんかと並べられるのは向こうにも失礼だろうし。

「そうだ、それじゃあお前のその暴走したスピードはどうやって出ていると思う？」

「どう、って……走ってるから脚の筋肉とか踏み込みとか、走るための諸々の運動から出てるんじゃないんすか？」

「そうだな、じゃあハーツ、お前はあの時の走りと同じ速度を今日、選抜レースの時と同じ準備運動量で出せと言われたら出せるか？」

「……多分、出せないっす」

「だろうな、本番に強いからだとか、他に追いつがる為に限界以上のスピードが出たとか、そういうんじゃない。授業のレースとかは普通の走りをしてるからなお前は」

「それで、何が言いたいんすか」

「俺はお前のあの速度に関して、ある仮定を立てた。とりあえず今から流す音を聞いてくれ」

トレーナーから渡されたイヤホンを付けると、どうやら流れているのは昨日の選抜レースを録音したものらしい。

聞く限りだと映像も残っているのに、どうして音声だけなのだろうか？

そう疑問に思いながら聞いていると、ゲートの開く音がした。

その瞬間――

ドッドドッドドッドドッド、とウマ娘が走る音とは別にエンジン音のようなものが聞こえてくる。

いや、違う、これは……

「その音声は映像とは別に俺が集音マイクで録音しといたやつだ、使わなくても耳の良いトレーナーには聞こえてたかもしれないけどな」
「こ、これって……」

「気づいたか？ それがレース中にお前の通常スペックを超えた走りを与えたものの正体、その心臓の音だ」

「えっ、というか大きき……こんなにしっかり聞かれてたんすか!」

「バッチリな、まさかと思ってマイク用意しといて良かったよ」

「なんか恥ずかしいんすけど……」

自分にしか聞こえていないと思っていたものが他人にも聞こえている、それ以上に恥ずかしいことがあるだろうか。

少女漫画なんかだとドキドキするエピソードかもしれないけど、レース中に、しかもトレーナーにマイクで拾われているというのはマニアックが過ぎる。

というか、それならもしかして一緒に走っていた他の子たちにも聞かれてしまっていたのだろうか、うるさくなかったかな。

「まあ、ともかくだ。お前は周囲に聞こえるほどの異常な心拍数の上

昇と、それによって発生した熱量を運動量に変換してあの速度を出してるわけだ。正直あまりにもデータラメだが、これを利用しない手はない。つまりだな」

「つまり……？」

「あの走りを、お前の「必殺技」にするぞ。完璧にモノにできればお前に勝てないレースはない、断言する」

「おおおお!! 必殺技！　なんか凄そうっすー！」

「凄そうじゃなくて凄いんだよ、まあ課題はまだいくらかもあるが。それを解決するために秘密特訓の準備もできてる、やるか？」

「やるに決まってるじゃないっすか！　勝てるんならなんでもやっつやるっすよー！」

「よし、じゃあ今から俺が案内する場所に、文句は言わずに付いてこい」

その建物を見た第一印象は、よく掃除がされているなどいうものだった。

小さい駐車場に雑草はなく、植え込みに咲いた花はよく手入れがされている。

そこまで人の手が入っているというのに、その建物からは人の気配を一切感じさせなかった。

それもそのはず、トレーナーに連れられて来たこの建物の入り口には、大きく休業中と書かれた札と南京錠でロックされた鎖がかけられていた。

「トレーナー、秘密特訓の為に連れて来たんすよね？　ここ閉まってるじゃないっすか」

選抜レースの次の日、私はトレーナーにレースに勝つための特訓をするため、と言われてここに連れてこられたのだ。

秘密特訓、と言われたので無人島に連れて行かれたり、体に丸太を打ち付けたり、吊られたりするのかもしれないとは思っていたのにそうではないら

しい。

それにしても急にこんな無人の建物に連れてこられて、この人本当に大丈夫なのか？　と思わなくもなかった。

「それに関しては問題ない、合鍵がある」

トレーナーはそう言いつつ鍵束を取り出して手際よく南京錠を外し、続いて扉の鍵も開錠していく。

「なんか悪いことしてるみたいっすね、それ……」

「別に盗みに入る訳でもなけりややましいこともねえから問題ない。ほら、開いたんだから入るぞ」

そう促されて建物に入ると、中にはいくつかのソファと、受付と書かれた窓口が一つ。

誰でも見たことがあるであろう、一般的な病院と同じものだった。

「ここって病院……？　ってちよつと！　置いてかないでほしいっす！」

明かりが一つもついておらず薄暗い院内を、トレーナーは勝手知ったるといふ様子でずんずんと奥へ進んでいく。

そこまで大きくない建物とはいえこんなところで置いて行かれると怖いので、疑問はあれどさっさとついていくことにした。

「特訓なのになんで病院なんすか、私悪いところなんてないっすよ。それにここなんなんすか、合鍵持つてるし、勝手に入るし」

「……この院長が知り合いでな、今は稼ぎに出てるから閉めてるんだが、使う許可だけ貰って来た」

「使う……って、何をつすか？」

「ハーツ、高地トレーニングって知ってるか？」

「ええと、確かマラソンの選手とかがやってる高いところでやるやつっすよね。普通の場所でするより効率がいいとかで。でもここも平地っすよね」

「そうだな、まあ難しい話は置いて持久力の向上効果があると一般的に言われているが気圧の変化とか移動の問題で難しいがそれを解決する設備がここにはある」

早足に歩いていったトレーナーの足が「gym」と書かれた部屋の前

で止まり、扉を開く。

中には、ランニングマシンやバイク、ウエイトレニングの為のマシンなんか数が少ないながらも鎮座していた。

見たところそこまで学園にある設備と変わらない、いや、もしかしたら理事長が私財を投じたらしいあちらの設備の方が上かもしれない。

でも今までの話の流れからしてここは……。

「常圧低酸素ルーム、ここでもなら気圧の変化による体調の悪化なんかも気にせず高地のそれと同じ効果が得られる。まあ都内にあるデカイジムにあるのと同じだな。設備は超一流とまでは言えないが」

「いや、それでも病院にあるにしては異常っすよね、なんなんすかここって」

「アホの院長が半ば趣味で作った病院併設のジムだ、当の本人はこれに金使い過ぎて稼ぎに出るハメになったが。その間俺達が使い放題だぞ」

「使い放題って、いいんすかねそれ」

「まあ、なんだ。デカイジムに行ったら金がかかるしな、体験入会やらの混雑で拘束される時間もある、こっちの方が自由でいいだろ。トレセン学園からそう遠くねえから門限もそこまで気にしなくていいしな」

「あつ、つまりお金をケチったんすね！」

「そういう側面もあるけど言い方ってもんがあるだろ……まあいい、今日から学園でのトレーニングが終わり次第ここで追加でやるからな。まあ神社の自主トレが全部置き換わると思ってくれ。かなりハードになるがお前の「必殺技」のためにはスタミナはいくらあっても足りない事はない、いけるな？」

「勿論っすよ！ 勝つためならなんだってするって言ったんすから、望むところっす！」

こうして、私たちの秘密特訓の幕が開けた。

模擬レース

私とトレーナーの秘密特訓が始まってから、既に一か月の時間が流れていた。

最初はランニングマシンをこなすだけでバテていたのに、今では随分と余裕ができていた。

ウエイトトレーニングで使う重りの重量も増え、また今度増やそうか、などとトレーナーと話すまでになっていた。

他に変わったことと言えば、学園のトレーニングルームを見て追加したらしいサンドバッグが増えた事くらいか。瓦は毎回割るとお金がかかるから見送ったらしい。

やはりトレーナーはお金をケチっているのでは？ と思わないでもないけど、蹄鉄やシューズはちゃんとした物を用意してくれているのでそんなことはないみたい。

そんなことを考えられるくらいにはここでの特訓が日常になってきた頃……

「ハーツ、今日はもう上がっていいぞ」

後ろで見ていたトレーナーに、そう声をかけられた。

「えっ、いつもより全然早くないっすか？ 私まだまだいけるっすよ？」

「明日はいつもと違うメニューでやってもらうからな、今日はもう休んで明日に備えろ」

「そんなの聞いてないっすよ！」

「それに関しては本当にすまん、前々から準備はしてたんだが先方の返事待ちだったからな。今さっきやっとOKが出たもんでな」

本当に申し訳なさそうな様子を見るに、どうやら言っていることは本当らしい。

それなら仕方ないと納得するけど、相手が居るといふ事は何をやる気だろう、ついに秘密特訓が秘密じゃなくなるのだろうか。

「なるほど……？ それで、明日は何するんすか？」

「模擬レースだ」

「模擬……レース、レース。えっ、レースやるんすか!？」

「そりゃ模擬レースって言ったらレースやるに決まってるだろ。他に何するんだよ」

「いや、そりゃそうっすけど、なんで今になってやるんすか？ 必殺技のための秘密特訓ってデビューまで隠しとくやつだと思ってたんすけど」

「なんでっってお前、その必殺技をコントロールする特訓はやってないからだろ。結局一人でどうにかしようとしても何も起きなかったしな」

「うぐっ、痛いところ突くっすね」

「一人でなんとかなるんならそれでも良かったんだが、どうせデビュー前に併走やるつもりだったし丁度いいだろ」

何かきっかけでも掴めればより良いしな、と付け加えてトレーナーはこちらに悪戯っぽい笑みを見せてくる。

つまり、明日のレースで必殺技をモノにしろ。とこちらに期待しているのだろう。

レース、その言葉に対して少しだけ怯えている自分が居た。

今まで一度も勝ったことのないそれにまた挑んで、負けたりしないだろうか。

負ければこの一か月を、秘密特訓を否定してしまうことにならないだろうか。

「相手……」

「ん？」

「相手は誰なんすか？」

もしかしたら、トレーナーが負けによる自信喪失を心配して今の自分に合った相手を選んだかもしれない。だなんて既に負けているような発想でそう聞いてしまう。

でもそんな淡い希望も、彼から放たれた一言で打ち碎かれることになる。

「……アグネスタキオン」

「……は？」

「いやあ。馬場は良好、君のトレーナーが気を回してくれたおかげで観客もほぼ居ない。私達二人が実験をするのに絶好の状態だと思わないかい？ シュラーク君」

「そうっすね……実験とかはよくわかんないっすけど」

スタート位置に立ったところで声をかけられたけど、緊張のあまりそっけない返しになってしまう。

あのアグネスタキオンとレースをするというのだから当たり前だ。クラスメイトで、問題児扱いされていても実力は確かで、その速さに敵う者はほとんど居ない。

まだ必殺技をモノにしていないうちに勝てるウマ娘じゃない、そう思う。

「……」

この期に及んで、本当にやるの？ という目をトレーナーに向ける。

彼はこちらを真つすぐ、ただ真つすぐに見つめていた、「お前を勝てるウマ娘にしてやれる」と言ったその時の目、そのまま。

私の事を信じている、勝てるのだと、お前はやれるのだと。そう目が訴えている。

そんな目を向けられたら、自信がないだとか、無理だとか言っていられない。

だから——覚悟は決まった。

ゲートが開く、出遅れはない、でも。

いつものレースでのスタートじゃない、特訓の成果が出たのか、いつもより早く走れている。だけど。

あの心臓の音が、自分にも聞こえない。

この走りはいつもの……そう、あの暴走が出てない時の普通の走りだ。

タキオンさんとの距離はまだ大きく離れていない、でも。

(マズい……)

このままだと、最後のスパートで、いや、もつと前の段階で決定的な差が出てしまう。

彼女の「超高速」と呼ばれる末脚の前では……。

(待って……)

私は今、何を考えた？

いや、今だけじゃない、レースが決まってから？ もつと前だ。

私はもしかして、口では勝ちたいだなんて言っているのに、レースに勝てないものだ、自分自身を評価していた？

だったら、そうじゃないでしょ。

トレーナーは、勝ちに飢えている私に可能性を感じたんだ。

「勝ちたい……勝ちたいっすー！」

でも、それじゃきつと足りない。

勝ちたいんじゃない、私は——

「勝つんっすよー！」

ドクン——

そう、この感覚。

ドクン——ドッドドツ

うるさいほどに心臓が早鐘を打っている、だけど。

だけど、それが今、とても心地いい。

見えている景色が遅くなる。

細かく意識しなくても、勝手に脚が前に進もうとして動く。

もつと、もつと、もつと、もつと！

奥から奥から湧き上がる衝動に、身を任せて。

走れ——ハーツシユラークわたし

「いやはやまさか負けてしまうとはね、私の予想以上だよ。君のそれは」

レースの結果は、私の勝ちに終わった。

タキオンさんはあまり勝敗に頓着しないとはわかっていたものの、敗北をあまり気にしていない様子と合わせてみると実験というのは本当だったらしい。

「それにしても、ふむ。レース中の音だけでなく全身の体表の色の変化……これは心拍数の上昇によるものかな？ 実に興味深い」

それにしても、レースが終わった後にじろじろと体を観察されるのはむず痒いものがあるというか、正直恥ずかしい。

汗とかすぐくかいてるし……それは向こうも同じか。

「おう、お疲れさん。必殺技をものn「タキオン！ お疲れ様！」

などと考えているところに、トレーナーと……その言葉を遮ってタキオンさんに駆け寄った人が一人。

暗めの色の長い紫髪をポニーテールに結び、黒いスーツを着た長身の女性だ。

「全く元気のいいモルモットだね、映像とそのトレーナーから提供された資料はちゃんと持ったかい？ 研究だけでなくトウウインクルシリーズで走るのにも必要だからね」

「うん、バッチリ！」

二人の会話を聞く限り、彼女が前にタキオンさんが話していたモルモットくん、うちのトレーナーと同期の一人らしい。

それにしても、今彼女は気になることを言わなかっただろうか？

「あれ……？ タキオンさんトウウインクルシリーズに出るんすか！？」

「ああ、そういえばシュラク君はずっと秘密特訓とやらで練習漬けだったから知らなかったのかな。君にトウウインクルシリーズに出るつもりはないと言った数日後に色々あってね、このモルモットくんと出ることになった」

色々、の中に何かがあるのかはよくわからないけど、二人の距離感を見るにかなり大きなことがあったらしい。

とにもかくにも、彼女がレースに出るということは……。

「つまり、リベンジのチャンスはあるって事。うちのタキオンは次は絶対負けないからね！」

「モルモットくん、前にも言ったように私は実験を優先するから勝敗はあまり重要視していないのだが」

「ええー！…ここは負けないって言おうよ！ 私だけ盛り上がってるみたいじゃん！」

どうもぐだぐだしている感じだけど、どうやら宣戦布告をされたらしい。

だとしたら、受けて立つしかないだろう。今日の勝者は、私なのだから。

「望むところっすよ！ 私だって必殺技をモノにしたんすからね、次も、その次も、タキオンさんには負けないっすよ！」

今までの私だったら絶対に言う機会はなかったであろう言葉に、少しだけ得意になる。

こういう関係をライバルというのだろうか？ だとしたら、自分がそこまでになれた事が嬉しい。

トウウインクルシリーズで競い合えるなら、きつとその先も、ずっとずっと先まで競い合っていたい。

初勝利の自惚れかもしれないけれど、純粹に、そう思った。